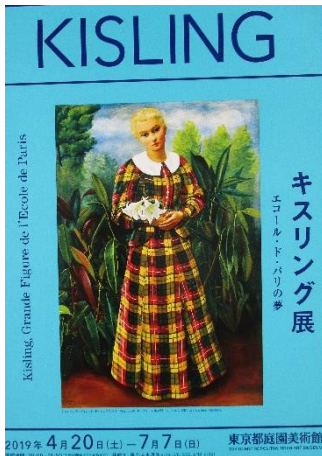


キスリング展 エコール・ド・パリの夢

東京都庭園美術館 2019.04.20～07.07 岡崎市・秋田市などを巡回



「東京都庭園美術館」は、東京・港区・白金台にある東京都立美術館で、旧朝香宮廷（きゅうあさかのみやてい）とも呼ばれ、建物内装はアール・デコ様式で、フランスのインテリアデザイナーの粋を尽くしたとても洒落た建物である。

「モイズ・キスリング」（1891～1953）は、オーストリア生まれで19歳時にパリ・モンマルトルで絵を描き始めたポーランド人の画家で、陽気で面倒見の良いリーダーであったために「モンパルナスの帝王」とも呼ばれて、1920年代後半には数多くの独自のスタイルの作品を制作している。画伯は、「モディリアーニ」「藤田嗣治」らとともに、エコール・ド・パリの代表的な作家として知られている。

本展は、2007年に国内5会場を巡回以来12年ぶりに、国内外の美術館、個人蔵の作品などに米国亡命時代の作品を含む「約60点」が展示されている。

《サン＝トロペでの昼寝（キスリングとルネ）》 1916年 油彩/カンヴァス



南仏港町サン＝トロペでの鮮やかな色彩にあふれて、きらめく陽光の温度が肌に伝わってきそうな作品で、手前の青いズボンの男性は画家自身、赤いドレスの女性は結婚することになる恋人「ルネ」で幸せなひとときが色彩豊かな色で捉えられている。

作品は、画伯が画風を確立する以前の模索の時代に描かれたもので、単純化された形、多視点的な画面構成、はっきりした色彩などには、「セザンヌ」「キュービズム」「フォービズム」の影響が表れて独自の画面を築きあげている。

この作品には、“視線を面で誘導する仕掛けがある”とされるのは、手前の床に落ちる木の葉の影は、画伯の白いシャツや中央のテーブルにも同様に浮かび上がり、ズボンの青、ドレスの赤と同じ色調が背景にも使われていて、鑑賞する人の視線を奥へ奥へと誘っている。

《ベル＝ガズー（コレット・ド・ジュブネル）》 1932～33年頃 ポスター

画伯は独自のスタイルを発展させたが、なかでも「肖像画」にその特徴がよく表れているとされている代表的な作品である。